

IV. 子どもの遊び場機能

1. 子どもの遊び場を重視する理由

基本構想において「子どもの遊び場・居場所機能」を特に重視して検討することとしましたが、その理由について改めて整理すると以下のとおりになります。

なお、SW施設においては、遊び場が居場所も兼ねるものとして「子どもの遊び場」と表記します。

◎基本構想において「子どもの遊び場」について特に重視して検討することとした理由

- ・子どもの頃からの運動習慣は、健康的な身体の育成だけでなく、非認知能力や社会性の向上にも重要な役割を果たすと言われている。
- ・屋外環境の悪化や保護者の不安増大、社会情勢の変化などにより、子どもたちの「安全な遊び場」や「安心して過ごせる居場所」の確保が課題となっている。
- ・アンケート調査などにおいて、「子どもが安全に遊べるスペース」や「全天候型の屋内遊び場」を求める声が多くある。
- ・親世代への運動の動機付けや、多世代交流など副次的な効果も期待できる。

2. 子どもの遊び場に期待する効果

SW施設において子どもの遊び場を整備することで、主に以下のような効果を期待します。

◎子どもの遊び場機能に期待する3つの効果

【効果1】体育施設との連携×リット

遊び×**運動**=運動遊び

【効果2】運動習慣化へのつながり

運動遊び×**日常**=運動習慣

【効果3】子どもから大人へのひろがり

運動習慣×**周囲への波及**=運動文化



健康寿命の延伸



SW施設の基本理念の実現

「運動する日も、しない日も。」

SWing! Tagajo

3. 子どもの遊び場のコンセプト案

SW施設における子ども遊び場のコンセプト案について、以下のとおり設定しました。

Concept 1

「走る・跳ぶ・登る・ぶら下がる・転がる・つかむ」などの基礎的運動動作を、傾斜・高低差・感覚刺激などを通じて遊びながら自然と身に付けられる環境



イメージ:シェルターインクルーシブプレイス
コパル(山形市)



走る



跳ぶ



登る



ぶら下がる



転がる



つかむ

地形が子どもの身体機能を自然に育む



Concept 2

子ども自身が考え、挑戦し、遊びを創造できる屋内公園的な遊び場



あつまる

つくる

やすむ

自由な発想と仲間との関わりが、想像力・主体性・社会性を育む

※画像やイラストはイメージです。

4. 子どもの遊び場の利用者・ターゲット設定

コンセプトに基づき、子ども遊び場の利用者・ターゲットについて以下のとおり設定しました。

- 主なターゲットは、生涯にわたる運動習慣の出発点である未就学児+小学校低学年(2歳程度～8歳程度)とし、発達段階に応じた難易度やチャレンジ要素を用意する。
- 利用者の年齢差によるミスマッチに配慮した緩やかなゾーニングを行う。
- あわせて、小学校中学年(9歳程度)以上に対しては、スポーツ体験やスポーツ少年団などの地域活動への接続を意識したソフト事業により、継続的な運動習慣化への導線を描く。



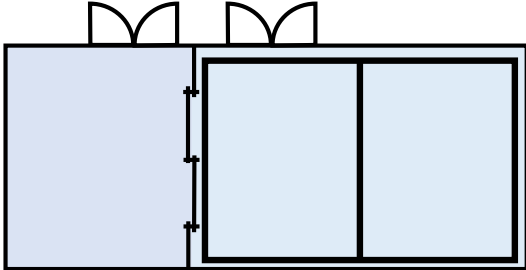
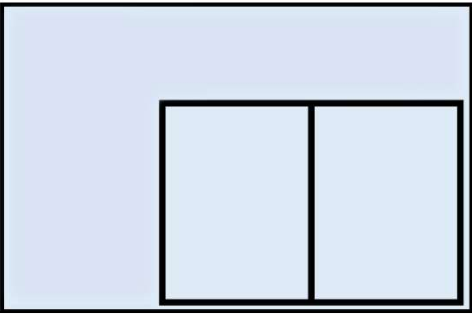
※子サポ＝多賀城市子育てサポートセンター

5. 子どもの遊び場の形態(1/2)

コンセプトを効果的に実現するため、子どもの遊び場の形態・規模について以下のとおり想定しました。

- 「これまでにない体育施設」のメイン機能として、できるだけ新規性を重視する。
- 専用の「遊び場」として独立させるのではなく、サブアリーナや共用空間と視覚的・空間的・動線的につながる構成とし、周遊的な動きを促す。
- 面積制約や安全性を踏まえ、空間の工夫・時間帯による運用を組み合わせ、スポーツ利用としての専用利用と遊び機能が共存できる仕組みを構築する。
- 以上を踏まえ、サブアリーナと連携した常設の遊び場機能を400～500㎡程度(遊び場部分のみ)確保する方向で検討。

■想定する子ども遊び場とサブアリーナの連携パターン

パターン	A. 接続型	B. 融合型
イメージ	 遊び場をサブアリーナに隣接して設置 サブアリーナと連結させて使用可能	 サブアリーナと同一空間に、サブアリーナを囲むように遊び場を設置

IV. 子どもの遊び場機能

5. 子どもの遊び場の形態(2/2)

子どもの遊び場とサブアリーナの連携については、以下のようなことも留意しながら、引き続き検討します。

サブアリーナとの連携メリット

- ・視覚的／空間的／動線的につながることで、遊び場を利用している子どもたちにとってスポーツがより身近な存在になる。
- ・サブアリーナも含め一体的に利用することで、子どもたちのよりダイナミックな運動遊びが可能になる。
- ・これらによって子どもの遊びへの保護者参加の幅が広がる。
- ・施設としての面積効率が上がる。

留意点(今後の検討事項)

- ・サブアリーナとの機能連携は、安全面・面積効率・機能の中途半端化に留意が必要である。
- ・保護者参加型の仕組みは、おとなの運動習慣化・フィジカルリテラシー醸成という価値がある一方、利用可能人数などへの留意が必要である。
- ・デジタル要素や感覚刺激は、更新性・飽きにくさを高める補助的手段として有効であるものの、利用人数や専用スペースとのバランスを考慮する必要がある。

相乗効果が期待できる付帯的な機能

- ・親子で軽食を取れる休憩スペース
- ・静のスペース(読書など)
- ・乳幼児の兄弟などが利用できるスペース
- ・屋外広場・インクルーシブ遊具
- ・子育て相談・支援イベントができるスペース

安全面等の課題

- ・子どもと競技利用者の動線交錯(人、物)
- ・保護者やスタッフからの視認性
- ・施設規模を超える遊び場需要があった場合の定員管理